

2013

広報

おばま 11

《表紙》

雲浜保育園で、小浜第二中学校3年生の生徒25人が園児74人を相手に、保育士体験を行いました。生徒と園児は、最初は慣れない様子でしたが、すぐに仲良くなり、手をつなぎ、笑顔で言葉を交わすなど、心を通わせていました。

(10月9日・城内一丁目)

【特集】 豪雨災害を乗り越えて



上／江古川などで16日夜間まで冠水状態が続いた（写真は江古川） 右上／決壊した野木川の堤防（若狭町下野木） 右下／濁流に流された南川の飛川橋（下中井）

降り続いた雨により、野木川の堤防が決壊（写真左上）。太良庄は冠水により17日朝まで孤立状態となった（福井県防災航空隊提供）

豪雨災害を乗り越えて

9月16日。台風18号の本土縦断にともない、本市を襲った豪雨は、「過去に例を見ないほどの規模」として、気象庁が全国でも初となる特別警報を発表。各地で冠水や土砂崩れが起こり、住宅の全壊や浸水など多くの被害をもたらしました。

■問い合わせ 生活安全課 ☎内線473

9月15日の深夜から16日にかけて、嶺南地域を中心に襲った台風18号にともなう豪雨は、本市においても24時間雨量384ミリと、観測史上最大を記録。市では、16日2時10分に避難準備情報を、3時30分には避難勧告を市内全域に発表しました。広い範囲で、土砂崩れや河川の氾濫、道路などの冠水が起こり、住家の全壊や一部損壊、床上・床下浸水の被害が多数発生。事業所でも大きな損害が出るなど、地域のインフラ、住民生活、産業に甚大な被害が発生しました。この、近年に経験のない規模の大災害からの復旧作業が、今も各所で続いています。

被害の状況（10月10日現在）

- 雨量**
9月15日⑨～16日⑩の総雨量は413.5mm。（15日12時40分～16日12時40分までの24時間雨量384mmは市の観測史上最大）
- 住家被害**
全壊2棟、一部損壊5棟、床上浸水41棟、床下浸水157棟
- 非住家被害**
全壊10棟、一部損壊7棟、床上浸水19棟、床下浸水81棟
- 道路被害**
市道66カ所
- 橋りょう被害**
市道飛川線飛川橋ほか3橋
- 河川被害**
市管理河川88カ所
- 農業被害**
各地区で水田冠水
農地・施設被害253カ所
- 林道被害**
若狭幹線ほか73路線225カ所
- 山地被害**
土砂崩落など16カ所
- 海岸被害**
海岸漂着物13カ所

災害・避難情報はここから！

市では、音声告知放送（来春から防災行政無線）に加えて、メールによる災害や避難の情報を知らせています。台風18号の際にも、避難勧告などの情報を配信しました。

ウェブサイト(<http://bousaiobama.mail-dpt.jp/>)か、右のQRコードから仮登録の手続きを行ってください。本登録の手順を案内します。開始は本登録完了後となります。



※QRコードを認識できるカメラ付き携帯電話で上の図形を読み取ってください

災害支援金の受付

市では台風18号の住宅被害などにあった被災者支援に活用する目的で、支援金の受付を行っています。集まった支援金については、配分委員会で分配方法などを決定し、被災者支援に役立てます。

受付期間 11月29日⑩まで

問い合わせ 社会福祉課 ☎内線182

直接の場合

受付窓口

庁舎1階社会福祉課まで。同口ビーにも支援金箱を設置しています。領収書の必要な人は同課で受付・発行します。

振り込みの場合

受付口座

福井銀行小浜支店
普通6037973

口座名義

オバマシサイガイシエンキン
小浜市災害支援金



上/県内外から多くのボランティアが復旧作業に参加(江古川)
下/各地域で住民とボランティアの温かな交流も(加茂)

昨年9月に小浜市社会福祉協議会と行政を中心に、市民有志、団体が連携して立ち上げた「小浜市災害ボランティアセンター連絡会」。災害発生時にボランティアと被災者をつなぐ存在として、今日まで訓練や研修を積み重ねてきました。

今回の災害時にも、9月17日に「小浜市水害ボランティアセンター」を立ち上げ、被災地域の状況把握を行うと同時に、ボランティアを募集。県内外から集まった延べ780人のボランティアとともに、被災地域の復興にあたりました。

人と人との温かなつながりが復興を後押し



右/山から流れ出た大量の土砂により住宅が全壊(忠野・福井県防災航空隊提供) 上/国道162号は土砂で一時通行止めに(志積) 下/国道162号の深谷地係でも雨の影響で道路の一部が崩落した



観測史上最大の雨。市内には大きな爪痕が



左/人魚の浜海水浴場をはじめ市内の海岸には大量の木やゴミが流れ着いた(白鳥) 右上/久須夜ヶ岳山頂まで続くエンゼルラインも土砂崩れにより一時通行止めに(嶺南振興局提供) 右下/JR小浜線の橋脚に残る大木が災害当時の水位を物語る(南川)



水害ボランティアセンター
本部長 豊永 真誠 さん(59歳・高塚)

ボランティアの皆さんはもちろん、建設業会をはじめとした企業、団体、地域の協力を得ながら、復旧作業にあたることができました。初めての経験で、最初は暗中模索の状態でした。毎晩、反省と改善のミーティングを繰り返すことで、被災現場のニーズに応じていけるようになりました。被災した世帯の高校生から、「大学に行ったらボランティアサークル入る、ボランティアかっこええわ」という声をもらい、ボランティア活動は「人の心を耕す」と実感しました。

被災した家の縁の下に入り、泥だらけになりながら、作業をしてくれるボランティアの人の姿には心を打たれました。加茂は一人暮らしの家も多く、当初はボランティアの受け入れに身構える人もいました。そこで、間にわたしのような地元の間人が入り、地域の人に、安心してボランティアを受け入れてもらえる体制を作ることができました。今回のような災害のときは、ボランティアと地域の住民が一体にならないと、取り組めない問題だと思いました。



加茂区住民
竹中 嘉浩 さん(51歳)